

International Development Center of Japan
IDCJ 国際開発センター

事務嘱託職員の声 ～3年目を迎えて思うこと～

業務支援室 岩崎 駿

事務嘱託職員採用制度の3期生として当センターに入職した岩崎と申します。この事務嘱託職員採用制度は、3年間の期限付きで主に学部卒業生を職員として採用するもので、私は今年、その最終年を迎えています。入職後は主にプロポーザルの作成支援とプロジェクトの間接支援を担当してきました。この制度の特長は、学部卒業後すぐに開発途上国における開発プロジェクトに関連した仕事に携わることができる点です。プロジェクトの後方支援を通じて、どのようにプロジェクトがつくれ、また目標が達成されるのか、大まかなイメージをつかむことができました。その一方で、この制度を利用して当センターに入職すると、契約期間中は原則的に日本国内での業務がメインとなります。そもそも開発業界では、高度な専門知識と職務経験を兼ね備えた即戦力が求められるため、職務経験の浅い若手職員がすぐに国外の開発現場に参加することは現実的ではありません。それでもやはり、ほかの職員が世界各地を忙しく飛び回る姿を見れば、歯がゆい思いをすることもあります。

このように、事務嘱託採用制度にはメリットもあればデメリットもあります。加えて、3年間の任期を終えて当センターを離れた後にこの経験が生きるかどうか、正直なところ分かりません。ただ一つ言えることは、この制度で採用されたからこそ、学部卒の私でもこの業界を眺めるチャンスを得られたということです。この業界にさまざまなイメージをお持ちの学部生の皆さん、国際開発の中をのぞいてみたいはありませんか？鬼が出るか蛇が出るか、それはのぞいてみてのお楽しみです。



当センターのオフィスにて。数年後には現場でタッグを組むことを夢見て

業務支援室 渡邊 聖也

事務嘱託職員採用制度3期生として当センターに入職した渡邊と申します。この記事を読んでいる学部生の皆さんの中には、国際協力・途上国開発に関する授業を受けている方も多いと思います。しかし、実際にプロジェクトが現地でどのように進められ、開発コンサルタントがどのような役割を担っているのか、具体的にイメージすることはなかなか難しいのではないのでしょうか。

契約期間中は国内業務が中心のこの制度では、プロジェクトメンバーとして現地業務に携わる機会は少ないですが、支援業務を通じて数多くのプロジェクトに関わることで、業界の一般的なルールから具体的な事例まで、開発の世界を幅広く学ぶことができます。また、さまざまな国・分野のプロジェクトを担当することもあり、学部で勉強したことのない分野やそれまであまり興味のなかった国について新たな発見があるかもしれません。

一方、2015年2月に初めての海外出張を経験した際には、やはり現地に行ってみないと分からないことも多いことを実感しました。モザンビークでの2週間の出張でしたが、現地の雰囲気当初想像していたものとは大きく異なっていたため戸惑いを感じました。また、先輩コンサルタントの現場の仕事ぶりを間近で見ると、私自身も彼らのように専門知識と現場経験を早く身に付けなければと少し焦りも感じました。

ただ、この出張では国内で契約・精算業務を経験していたからこそ分かることも多くありました。精算書類をそろえたり、プロジェクト資金を管理したりといった業務は、一見地味ではあるものの、プロジェクトを最後まで滞りなく進めるにあたっては非常に重要な要素であることに改めて気づかされました。国内業務を経験してきたからこそ、出張後に必要となる作業まで想定した上で現地業務を進めることができたため、この制度の利点を生かせるのではないかと思います。

この3年間の業務は、途上国開発と聞いて思い浮かべるほど格好良いものではないかもしれませんが、将来開発コンサルタントを目指す学部生の皆さんにとっては貴重な経験になるはずです。